

1 ベと病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、ネギ、タマネギ、ワケギのほか、畦畔のノビルなどで越冬する。また、土壌中に残った被害組織も翌春の伝染源となる。苗床での感染が多いので、育苗期の防除が重要である。
- 2 タマネギでは、秋に苗床や本ぼで感染し、1月～3月に発病する（越年り病株）。3月頃から分生胞子が飛散して二次伝染し、発生が拡大する。
- 3 一般には、春や秋の1半旬の平均気温が20℃前後の時期に降雨が多いと多発しやすい。初発生に注意して、発病が少ないうちに薬剤防除を徹底する。

B 耕種的防除法等

- 1 畑地では連作を避け、輪作を行う。
- 2 肥料切れしないように適切な肥培管理を行う。
- 3 ほ場の排水を良くする。
- 4 タマネギでは、2～3月に越年り病株を抜き取り、ほ場外に持ち出して処分する。

2 白色疫病・疫病

A 生態と防除のねらい

1) 白色疫病

- 1 本病は土壌伝染し、ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ノビル、ユリ、チューリップなどを侵す。一般に2～4月上旬にかけて発生するが、冬季（12～2月）が温暖多雨の場合に発生が多くなる傾向がある。早期発見に努め、発病初期に防除を徹底する。
- 2 タマネギでは苗床でも発病することがあるので、発病株を本ぼに持込まないようにする。

2) 疫病

- 1 ネギでは夏期高温時に降雨が多い場合に発生が多く、排水不良や窒素過多のほ場で多発しやすい。ほ場の排水や施肥に留意し、発病を認めたら直ちに薬剤防除を徹底し、まん延を防止する。
- 2 タマネギでは苗感染の場合には被害が大きいため、栽培管理に留意して健全苗の育成を図り、予防防除を徹底する。薬剤散布は地際部にもよくかかるよう丁寧に行う。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避け、多発ほ場ではネギ類以外の作物を2～3年間栽培する。
- 2 ほ場の排水に努め、高畦とする。
- 3 窒素肥料の多用を避け、堆肥を十分施用するなど肥培管理に注意し、草勢を強健にする。
- 4 被害株の処分を行う。

3 黒斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 一般に5月頃から11月頃まで発生し、タマネギでは球が肥大する頃からの発病が多く、ネギでは肥料切れした場合に発病が多い。肥培管理に留意し、草勢を衰えさせないようにする。
- 2 薬剤防除は発病初期のうちに行い、被害葉はほ場に放置せず、除去処分する。
- 3 病原菌は種子伝染するので、健全な種子を使用する。



B 耕種的防除法等

- 1 ほ場の排水を良くする。
- 2 肥料切れしないように肥培管理に注意する。
- 3 被害葉の処分を行う。

4 さび病

A 生態と防除のねらい

- 1 一般に4～5月及び9～10月頃に発生するが、肥料切れして草勢が衰えると被害がひどくなる。
- 2 多発後の防除は困難なので、発病初期に薬剤防除を徹底する。

B 耕種的防除法等

- 1 肥料切れしないように肥培管理に留意する。
- 2 被害残さの処分を行う。

5 白絹病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は菌核あるいは被害植物とともに菌糸で土壌に残り伝染源となる。非常に多犯性の病原菌で200種以上の植物を侵す。
- 2 発生は夏期高温時、地表面に有機物が豊富なほ場や排水不良ほ場で発生しやすい。
- 3 発病後の防除は困難なので、水稻との輪作や被害植物の処分を厳重にし、病原菌の密度を高めないようにする。

地際の菌糸と粒状の菌核



B 耕種的防除法等

- 1 発病の多いほ場では4～5年水稻を栽培する。
- 2 被害株は、発見次第周囲の土とともに取り除く。
- 3 酸性土壌で発生しやすいので、適正な土壌pHで栽培する。
- 4 有機物は完熟したものを施用する。

6 軟腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 本病原菌はネギ、タマネギのほかダイコン、ハクサイ、トマトなど数十種の作物を侵す。
- 2 病原菌は土壌中に長く残存し、降雨の際に飛沫とともに下葉に感染したり、傷口や害虫の食害痕からも侵入する。好高温性で、土壌中の生存にはpH6～7が適し、土壌湿度が高いと増殖や感染に好適である。

B 耕種的防除法等

- 1 発病地では連作を避け、水稻を輪作する。
- 2 多湿土壌は発病に好適なので、ほ場の排水を良くし、高畦栽培とする。
- 3 窒素質肥料を多用すると生育が軟弱となり発病を助長するので、適正な施肥を行う。
- 4 発病株は抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

7 萎黄病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原体は、ファイトプラズマで、ヒメフタテンヨコバイにより媒介される。ほ場周辺の雑草地は、伝染源および媒介虫の増殖場所となると考えられている。
- 2 9月～11月は、媒介虫の個体数が多く、媒介虫率も高い時期であるため、最も感染が起りやすい。したがって、夏以降は、播種が早い程感染のリスクが高く、9月上旬から中旬にかけて播種する早生、中生のタマネギで発生が多い。
- 3 苗床では播種後30日頃から病徴が現れてくるので、発病株は除去し、定植時には苗の選別を行い、健全苗を植え付ける。

B 耕種的防除法等

- 1 育苗ほ周辺およびほ場内の除草を徹底する。
- 2 極端な早播きは避ける。
- 3 育苗期は防虫ネットで被覆し、ヒメフタテンヨコバイの飛来を防止する。
- 4 発病株は早期に抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。
- 5 定植時に苗の選別を行い、健全苗を植え付ける。

8 ネダニ類

A 生態と防除のねらい

- 1 ネギ、ニンニク、ラッキョウ、ユリ、チューリップ、スイセンなどの球根に食入し、加害、腐敗させる。
- 2 ネギやワケギに発生が多い。球根や根に寄生し越冬するので、健全な母球を使用する。
- 3 6～7月頃、夏ネギ苗の定植後に生育が悪く、のち欠株となる場合、多くはネダニの被害である。

B 耕種的防除法等

- 1 酸性土壌に多いので、酸度の矯正のため石灰を施す。
- 2 連作を避け、寄生の少ない作物（スイカ、カボチャ、シロウリ、ダイズ、ショウガ）を輪作する。
- 3 太陽熱消毒を行う。

9 ネギアザミウマ

A 生態と防除のねらい

- 1 早春から秋にかけて活動するが、梅雨後、高温、少雨になると発生が多い。
- 2 卵は寄生植物の組織内に産み込まれ、薬剤による殺卵が難しいので、初期防除に重点をおき6～7日おきに2～3回防除する。

B 耕種的防除法等

ほ場周辺の雑草を除去する。

10 シロイチモジヨトウ

A 生態と防除のねらい

- 1 発生は5月頃から認められるが、被害が目立つのは8月～10月である。成虫は葉身に卵塊で産卵し、ふ化した幼虫は葉の中に食入し内側から食害する。初期はカスリ状、その後は心枯れ症状を呈する。幼虫は生育すると分散し、葉の内側から食害する。
- 2 幼虫は葉の中にいて加害するため、薬剤散布による効果が上がりにくい。したがって、ふ化幼虫の食入防止をねらって卵の時期に防除を行う。

11 ネギハモグリバエ

A 生態と防除のねらい

- 1 年6回以上の発生で主として蛹で越冬する。ネギ類（ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ）等に寄生し、春季の被害が著しい。
- 2 被害は幼虫が葉肉内を食害し、不整形の短い白斑となる。
- 3 成虫の発生最盛期またはその1週間後の被害発生初期に重点をおき茎葉散布する。
- 4 発生は、5～10月にかけて長期にわたるので、防除もそれに合わせて行う。